

コレクションクエスト

ふだん公開していない収蔵物を紹介します。さあ、標本の世界を冒険だ!

文・写真/学芸員 古沢仁

2008年10月、森和久氏によって南区小金湯から発見された鯨類化石の一部です。私は最初に姿を現した5個の腰椎から、この化石が「セミクジラ類」と「ナガスクジラ類」のどちらに近いのかを調べてみることにしました。その結果、背骨が前後方向に長い「ナガスクジラ類」であろうという結論に達しました。



小金湯産クジラ化石(腰椎) SMAC731

ところが、2012年に頭部が発掘されると、頭の特徴はセミクジラ類だと判明。つまり、私の仮説は間違っていたのです。失敗は成功の母といいますが、間違いは大発見の父?といわれる研究の成果をできるだけ早く報告したいと思います。

File No.1 博物館クラブ

SMAC活動レポート

当センターで行われる、市民の自主的活動や、学校との連携など、様々な活動を紹介します。

この春、当センターに新しい仲間ができました。その名も「平岸高台小 博物館クラブ」。同小から、「『博物館活動センターでクラブ活動をしたい』と児童から相談を受けている」と連絡があり、当センターが協力することで発足したものです。センター内での実習には、12名のクラブ員が参加し、有孔虫(ゆうこうちゅう)※の化石を取り出す「化石クリーニング」を初体験。学芸員の手ほどきを受け、目を輝かせながら顕微鏡を覗きこむ子どもたちは、真剣そのものです。「知ることの喜びを伝えたい」と始めたセンター初の本格的なクラブ活動サポート。実習を終えた後、「将来こんな仕事がしたい」と興奮気味に話す子どもの姿に勇気付けられる思いがしました。



※脚注 有孔虫・・・主として石灰質の殻と網状仮足を持つアメーバ様原生生物



交通アクセス ■地下鉄南北線「澄川駅」北出口から徒歩約10分
■地下鉄南北線「南平岸駅」東出口から徒歩約15分

札幌市博物館活動センター infomation

入館料:無料
開館日:火曜～土曜 開館時間:10時～17時
休館日:日曜・月曜、祝日、年末年始(12月29日～1月3日)



ホームページアクセス QRコード



発行 札幌市博物館活動センター

〒062-0935 札幌市豊平区平岸5条15丁目1-6 Tel: 011-374-5002 Fax: 011-374-5014
Email: museum@city.sapporo.jp ホームページ: <http://www.city.sapporo.jp/museum/>

VEGETABLE OIL INK ミュースレターは、植物油インキおよび、環境省が定める「グリーン購入法」の適合紙を使用しています。

Muse Letter

札幌市博物館活動センター 情報誌 ミュース・レター

No.65
July 2016

クルマバツクバネソウ

羽子板の衝羽根(つくばね)に由来します。今で言うとバドミントンのシャトルが一番近いでしょうか。花びらはありませんが、葉、がく、雄しべ、雌しべが全て4の倍数で、その均整のとれた形は自然の妙としかいえません。

初夏の登山道わきや林の縁で見られます。



写真. モエ沼の眺め

水草は、水槽の中の金魚藻や、公園の池のスイレンやハスだけと思いませんか？野生の水草にもたくさんの種類があります。今回は、これまでに札幌市内の調査で確認した水草の中から、驚くべき仕組みや意外な一面をもった種類を紹介します。

まずはじめに、チューリップを丸っこくしたような黄色の花を咲かせるコウホネの登場です。コウホネは漢字で「河骨(川骨)」と書きます。なぜ骨なのかというと、コウホネの太くて白い根茎が、水の底にはい回るように長く伸びている様子から、まるで白骨が水に沈んでいるように見えるからだ、といわれています。おどろおどろしい感じがしますが、コウホネは薬草として「せんこつ」とも呼ばれ、人間の役に立つ水草でもあります。コウホネは札幌市内の沼の浅い場所や流れの緩やかな川に生え、創成川の一角にも生えています。

2つ目は、忍者の武器「撒菱(まきびし)」に使われたとも言われるヒシです。果実の刺のほか

に、ヒシは「浮き」という仕掛けをもっています。葉の柄の中間がこぶのように膨らんでいて、その部分を切ってみるとスポンジのようにすき間が多く、そこに空気が入ることで浮力を得ています。しかも、水面に水平に広がるように出た何枚もの葉は、上から見ると放射状になっています。そのため、多少の波や増水があっても、アメンボのように水の上でバランスをとって浮き続けることができます。

3つ目は、根を張らずに、水中に漂うタヌキモ類です。“根なし草”と書くと頼りなく思えますが、タヌキモ類は小さな動物プランクトンを捕える食虫植物でもあります。その「わな」は葉に作られる小さなつぼ状の袋「捕虫囊(ほちゅうのう)」で、袋のふたにある毛にプランクトンが触れると、水もろとも一瞬にして袋の中に吸い込むといわれています。ただ、こうして取り込む動物質の栄養の他に、自分で光合成をして栄養を作ります。これは、栄養分の少ない水質の中で生きていけるように進化した結果とされています。

4つ目は、水がなくなっても生きられる水陸両用の両生植物です。代表的なものがエゾノミズタデで、水深が深い場所では葉の幅が広く水に浮き、陸上では葉が細くなって少し硬くなります。もちろん、突然の水位の変化に合わせることは無理ですが、環境に合わせて自らの体の形を大きく変えられることで、水と陸の境界でも生きていけます。

このように水草は、水中で生きるための様々な形や仕組みをもっています。しかし、水中という環境は、植物が生きるのに欠かせない光と酸素が少ない“逆境”ともいえます。さらに、近年では全国的に人里に近い湿地や溜め池など水草の生息環境が減っている現実があります。

一方で、意外と多くの水草が見られるのが、もとの地形を残して整備された沼や川です。そうした場所はあまり積極的に調査されない盲点にもなります。札幌市博物館活動センターでは、今後も人間の生活圏に比較的近い水辺を調査することで、自然の変化をとらえていこうと考えています。

文・写真/学芸員 山崎真実



エゾノミズタデの花



タヌキモ類の花



タヌキモ類



コウホネの花



水面に広がるヒシ

ホットコラム

展示室につき

完成はいつだい？

○月×日 展示解説員 松橋杏子

移転オープンの日、再開を楽しみにしていた大勢の方が来館してくれました。お祝いの手紙を書いてきてくれた子や、休館中に質問できなかった疑問を解消し、すっきりした子、中にはお手製「化石かるた」を持ってきてくれた子もいました。

この「化石かるた」は図書コーナーに置いてあります。みなさんも楽しく遊んでちょっぴり化石に詳しくなってみませんか？

そして歩君、お姉さんは足らない札が増えていく事を楽しみに待っているよ！

